

CD 熟成された音楽／サイモン・ラトルとベルリン・フィル

演奏学科声楽専修3年

工藤賀大

初めての原稿依頼を頂き、何を取り上げようかと悩みの種に。その理由は、単純計算でCDを2点、365日借りたとして730点。これに近い数を借り続けて約2年半。図書館員の方にもすっかり顔と名前も覚えられるほど図書館に通い続けている私は自他共に認める「変わった人」なのだ。

その変わった人が今回紹介する資料は、声楽専攻にも関わらずオーケストラ作品にスポットを当ててみる。ペルリン・フィルのジルベスター・コンサートは、ウィーン・フィルのニューイヤール・コンサートのように年末年始の風物詩として毎年テレビを通じて（現地で？）ご覧になっている方も多いことだろう。私もその一人であるが、2007年のジルベスター・コンサートは過去のコンサートよりも更にエネルギーに満ち溢れ、そのエネルギーが自分の体の中に取り込まれ聴く者が浄化される、それは例えようがない不思議な空間へと誘ってくれたのである。

2007年のテーマはロシア音楽。ロシアと聞いて思い浮かぶ楽曲は多く存在するが、ムソルグスキーの『展覧会の絵』はその代表格と言ってもいいだろう。この曲が私の最も敬愛する指揮者、サイモン・ラトル氏によってより磨きのかかった演奏になり、聴く者の心に訴えかけて

くるのである。

ちなみに、ラトル氏は1955年英国生まれピアノと打楽器を学び、イングリッシュ・ユナショナル・ユース管弦楽団では打楽器奏者を務める。1971年にロンドン王立音楽アカデミーに入学、指揮を専攻、1974年にはジョン・プレイヤール国際指揮者コンクールで優勝、1976年にフィルハーモニア管弦楽団（英国）で指揮者デビュー、その後数々のオーケストラの客演指揮者として活躍し、1980年にはバミニングラム市交響楽団（英国）の首席指揮者となり、1990年には音楽監督に就任（このコンビは来日公演も行っている）。30代で英国・ナイトの称号を叙し、2002年からはクラウディオ・アバドの後任としてベルリン・フィルハーモニア管弦楽団の首席指揮者兼芸術監督に就任、現在もつとめ人気の高い指揮者である。

重厚な低音が曲全体をリードするペルリン・フィルならではのコンサート。他にもポロディンの交響曲や『だつたん人の踊り』まで堪能できるこの一枚。

是非一度味わって頂きたい！



請求記号 ●XD60561
『展覧会の絵：組曲／ムソルグスキー』TOCE-56025
Licensed by EMI Music Japan Inc.

●くどう よしひろ
1月に来日するベルリン・フィルとラトル氏。その先駆けともなる幻想交響曲のCDが発売され、すっかり有頂天ノこちら是非！

DVD オトナのファンタジア

演奏学科声楽専修3年

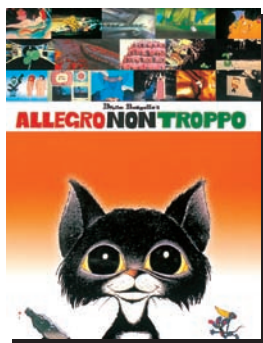
馬金佑紀

『ファンタジア』というデイズニー映画がある。数々の名曲にのせてデイズニーのアニメーションが踊ったり、美しい映像を見せてくれる有名な作品だ。観た事は無くても、誰でも一度はタイトルを耳にしたり、魔法使いの姿をしたミッキーマウスを目にした事はあるだろう。非常に有名だし、とても優れた作品だと思う。しかし、私が今回紹介するのはこの作品ではない。ファンタジアはファンタジアだが、ウォルト・デイズニーではなく、ブルーノ・ボツェットの『ネオ・ファンタジア』、原題“Allegro non troppo”である。

ネオ、といっても、こちらのファンタジアは魔法もなければ美しい踊りもない。代わりにあるのは現代社会に対する痛烈な皮肉、ブラックユーモア、いかにもイタリアンアニメらしい少々気持ちの悪いキャラクターたちだ。幕間の実写パートに登場する人物たちも、すぐキレる恐ろしい指揮者や、何故か全員老婆のオーケストラ（彼女たちがまたどうしようもなく切なくて最高なのだが）、気弱なアニメ作家などおかしな人物ばかりである。形式は同じでも、デイズニー作品の方とは相当かけ離れている。『ファンタジア』と違ってこちらは間違いなく大人向けの作品だと言えるだろう。

曲目は《牧神の午後への前奏曲》や《火の鳥》など、全部で6曲。曲ごとにストーリーがついており、変態の老人牧神の話や、コーラ瓶の残った液体から生物が始まる進化論、人間の進化の様子と愚かさをわかりやすく表現するものなど、一風変わった癖のあるストーリーが多く、中でも《スラヴ舞曲第7番》《悲しみのワルツ》《火の鳥》は、現代社会（製作されたのは70年代だが今現在にも十分あてはまる）を皮肉たつぷりに描いている。こんなおかしなストーリーばかりだが、何気に演奏はカラヤン指揮のベルリン・フィルだったりするので驚きである。

なんだかあまり褒めていないような作品紹介になってしまったけれど、私はこの作品が本当に大好きだ。こんなおかしな不思議な世界と素敵な音楽が同時に楽しめるなんて「Allegro non troppo」じゃなきゃあり得ない。是非色んな人に観てみていただきたい。観て損はありません、病み付きになるはず。ちょっと気持ち悪いけどね。



請求記号 ● VE1011
Bruno Bozzetto's Allegro non troppo
Asmik: ACBA-10269

● がんかね ゆっき 「大人の科学マガジン別冊 シンセサイザークロニクル」を買いました。イメージ使い方がよくわからず、てたらの演奏をして一人で遊んでいます。

女性作曲家 グバイドウィーナとの出会い

音楽研究科作曲専攻1年

小泉香

作曲科の皆さんは誰もがオーケストラを書くことを夢に見ていると思います。国立音楽大学の作曲科の卒業試験では、オーケストラを生の音で演奏して頂く機会が全員に与えられています。私も昨年は卒業試験にオーケストラ作品を出品しました。その時の四苦八苦した思い出をお話したいと思います。

学部の頃はいくつも室内楽作品を作曲しましたが、オーケストラという未知の世界に足を踏み入れた時、始めてすぐに今までとは違った編成の大きさに頭の容量がパンクしました。自分の中で、鳴らせる音をはるかに超えた縦の響き、音色。私は「あつ」という間にスランプに陥り、なかなか進まない譜面に気持ち焦り、毎週来るレッスンに恐怖すら覚えました。何も思いつかなくなつた時は、図書館で手当たり次第に楽譜とCDを借りて、どこかにヒントが隠されていないか、自分の音楽に取り入れられるモノはないか？焦りと情けなさでいっぱいなのと共に、AV資料室で時を過ぎました。苦戦していた時間が長かつたため、クライマックスを迎えた時には提出まで2週間をきつていたと思います。

もう悩んでいる場合ではないのに、再びスランプに陥つた私に、師匠の福士先生が「こ

れでも聴いて心を改めてみたら？」と喋って紹介して下さったCDが、ソフィア・グバイドウィーナ作曲の《Offerium》でした。

その音楽は、聴いたことがないような音色が何度も登場し、静かで音楽の流れが止まってしまうのではないかと思わせる場面や、そうかと思えば激しく、心を揺さぶるような場面があり、私は今まで聴いたことがない音の世界につれていかれました。

また、グバイドウィーナが女性作曲家だという事実も私に勇気を与えてくれました。音楽史に登場する女性作曲家は少ない。けれど、こんなに力強い音楽を世に放っている作曲家が存在して、今私に力を分けてくれる。この出会いは私にとって一生忘れられないものとなりました。

彼女は「私は音楽を構築するというよりは、木が何度も枝を伸ばし、葉や新芽を出すように音楽を耕す。」と語っています。私も作曲するという行為が、いつか自然とおこなえるように、自分の中にしかない音を見つけて世界に一つしかない木を育てて行こう。



請求記号 ● XD7207
Offerium ; Hommage à T.S.Eliot / Sofia Gubaidulina (Deutsche Grammophon F00G 20384) *現在の発売番号 UCCG-3513

● こいずみ かおり 作曲をしている時間は苦しいけれど、それとも曲を書き続けたいと思うのは、自分の曲が音になった時、とても嬉しいから。